イラン・ナショナリズムとタキーザーデーアゼルバイジャン分離問題をめぐって

1．　イラン・ナショナリズムと知識人

＊英露帝国主義の桎梏下、西洋の「モジュール」としてのナショナリズム導入・国民国家建設を目指す。カージャール朝への反専制と反帝国主義で一致、しかし次第に宗教・民族問題に直面。立憲革命後に政治から撤退しパフラヴィー朝独裁を招いたとの批判あり。

＊アーホンドザーデ：タブリーズ近郊出身のアゼリー系イラン人。イラン・ロシア戦争の結果 1829 年、アゼルバイジャン北部（東アルメニアを含む）がロシア領に。ロシア官僚でありつつデカブリスト知識人らと交流、イラン・ナショナリズムに基づくリアリズム的戯曲発表

＊マルコム・ハーン：アルメニア系イラン人。仏留学後、官営近代学校ダーロッフォヌーン講師。駐英大使の後『カーヌーン』紙発行、ナショナリズムの大衆化に貢献

＊タキーザーデ：タブリーズ出身のアゼリー系イラン人（1878－1970）。マルコム・ハーンなどの影響を受け、立憲革命（1906-1911 年）に参加。国会議員として憲法補則制定に貢献（ex. 第 8 条：国民の法の前の平等）。ブラウン・ケンブリッジ大学教授の支援。第一次大戦中、ベルリンでナショナリズム系新聞『カーヴェ』紙発行。パフラヴィー朝（1925～1979 年）期に財務大臣として英との石油交渉、駐英大使としてアゼルバイジャン分離問題に対処。1950 年から上院議長。研究として『古代イランの暦法』など。

＊キャスラヴィー：タブリーズ出身のアゼリー系イラン人（1888－1946）。イラン・ナショナリストとして独自のキャスラヴィー主義を展開。代表作『イラン立憲革命史』ではタキーザーデを痛烈に批判。アゼルバイジャンとイランの一体性を述べる『アーザリー　或いはアゼルバイジャンの古代言語』を発表。

2．　立憲革命とアゼルバイジャン

1）　アゼルバイジャン地域の特色

＊イラン北西部とコーカサスの中・南部にまたがる地域。『アーザリー』によれば元来イラン系民族が居住、北部はアッラーンと呼ばれた。アラブ征服を経て 11 世紀から住

民のトルコ化が進行、15 世紀に完成するがイラン言語・文化の影響下。1828 年のトルコマンチャーイ条約で北部がロシア領に。南部はタブリーズを首府にイラン・ナショナリズム、近代化の中心となる

史料１：タキーザーデ「アゼルバイジャンにおける立憲制の諸前提の醸成」より

新文明は、主に 3 つの源からアゼルバイジャンに入ってきた。また第二に、トルコ語を知悉していたこと、またそれによる精神的紐帯を通じ（原注：イランの他の地域はそれから除外されていた)、イスタンブル、オスマン朝諸地域、ロシア、特にコーカサス、そしてある程度はハーッジ・タルハーン（現アストラハン：ボルガ川下流のカスピ海沿岸に近い都市）とアシュハバード（現トルクメニスタンの首都）など（を経由して）であった。・・・コーカサスの目覚めた近代主義の人々について、当時、コーカサスのムスリムとイラン人の間に大きな相違はなかった。コーカサスの人々は自らをイラン人のように見なし､イラン人に同情しており､全員､自らをムスリム国民 mellat-e moslemān に数えていたため、イランに味方していた。さらに、未だにシーア派地域にはオスマン帝国の影響がなく、大衆が常に一団をなしてマシュハド、カルバラーに赴いていた。こうした中、知識人がときどきタブリーズを訪れ、アゼルバイジャンに影響を及ぼしたのである。

史料２：キャスラヴィー『アーザリー』より

我々の信ずるところ、今後、鉄道がイランの諸都市を連結し、新聞、雑誌、書籍が多く発行され、学校が村々にも設立されるにつれ、トルコ語はアゼルバイジャンにおいてすらより迅速、かつ顕著に後退するだろう。おそらく、イランの人々すべての言語がひとつとなり、トルコ語、アラビア語、クルド語、マーザンダラーン語、ギーラーン語、シースターン語、セムナーン語、バフティヤーリー語、サデ語、ロル語、シューシュタリー語などの今日の様々な方言や言語が、名称以外に残らないようになるまで、1－2 世紀とかからないだろう。

２）　石油都市バクーとアゼルバイジャンの近代知識人・新聞

＊ロシア領バクーの油田開発とイラン人労働者：19 世紀後半から油田開発開始、人口 20 万人を超え 1880 年代以降世界最大の油田地帯に。タキーイェフなどアゼリー系民族資本家が出現。アゼリー系を主とするイラン人労働者数万人が滞在。底辺の生活に甘んじながら本国へ送金、また新文明を仲介（ex. マラーゲイー『イブラーヒーム・ベ

クの旅行記』)。

＊北アゼルバイジャンの新聞：『アキンジ（農夫)』紙（1880 年代・アゼリー語)、『テルジュマン（翻訳者)』紙（ガスプリンスキー編集・共通トルコ語)、『シャルキ・ルース（東方ロシア)』紙（シャー・タフティンスキー編集・イランに接するナフジャヴァーンで発行)、『モッラー・ナスロッディーン』紙（コリーザーデ編集・イラスト新聞）

＊南アゼルバイジャンへの影響：タブリーズなどに読者獲得。1890 年代、タブリーズからアダーラトがペテルブルグに学び、シャー・タフティンスキーらと知己に。タキーザーデ、その学友タルビーヤトとともにタブリーズで新思想グループ結成。書店を経営し、『ガンジーネイェ・フォヌーン（技芸の宝庫)』誌発行

＊政党結成とラスールザーデ：社会主義の影響でバクーにラスールザーデら社会民主労働党（多数派はボルシェビキ）のアゼリー系メンバーにより 1904 年ヒンメト（活力）党結成。1906 年、同党はイラン系政党として社会民主党設立。タブリーズに「秘密本部」との支部ができ、立憲革命の際にモジャーヘディーンとの革命派戦闘員を供給。ラスールザーデは第二次立憲制期にタキーザーデと協力し、『イーラーネ・ノウ（新たなイラン)』紙発行。しかしトルコ・ナショナリズムの影響下、アゼリー・ナショナリズムを追及し、タキーザーデと袂を分かつ

３）タキーザーデの初期活動

＊父セイェド・タキー師はオルドゥーバード近郊農村出身でタブリーズの高位ウラマー。タブリーズ南部ノウバル地区に生まれ、幼少時からイスラーム教育を受ける。学友タルビーヤトとともに次第に西洋文明に関心を抱き、仏語、英語、天文学、医学などとともに西洋立憲思想に親しむ。新思想グループ結成、書店経営、学校設立（失敗）ののち『技芸の宝庫』誌（ペルシア語・西洋文物紹介・翻訳）を 1 年発行。

＊1904 年エジプト旅行、コーカサス（コリーザーデらと会う)、イスタンブル（マラーゲイーらと会う）経由でエジプト入り、アブドゥフらと面会。イラン史の帰結として立憲制樹立、さもなくば滅亡を説く「歴史的裁定によるイラン現状分析」執筆。名声を得る

４）イラン立憲革命とアゼルバイジャン：第一次立憲制（1906-08）－タキーザーデ、モスタシャーロッドウレらタブリーズ選出議員が主導。近代国民国家を約した憲法補則制定。シャーなど王族、地主、一部ウラマーの反発。反革命期（1908－09）－イラン・コサック

軍による国会砲撃。タキーザーデはデフホダーらと英公使館に避難（キャスラヴィーの批判)。英国にわたりブラウン教授の支援で英議員に働きかけ。タブリーズ蜂起発生、コーカサスから武器・戦闘員供給。タキーザーデは 09 年初めタブリーズに帰還、シャーと交渉、露軍のタブリーズ進駐で蜂起終了。テヘランは革命軍により奪回。第二次立憲制期（1909-11）－タキーザーデは議員選出。ラスールザーデ、アルメニア人らの支援で民主党結成、1910 年反イスラームの嫌疑で国会追放、イスタンブルに亡命、ラスールザーデと合流。しかしナショナリズムをめぐる方針の差が顕在化、タキーザーデは渡米

３．　パフラヴィー朝期の活動－アゼルバイジャン分離問題をめぐって

１）　レザー・シャー独裁下の活動：第一次大戦期のベルリンでの『カーヴェ』紙発行を経て、1924 年議員選出を期にイラン帰還。レザー・ハーンによる王政変更法案には反対するが、パフラヴィー朝成立（1925）後は協力（「強力な中央政府」への賛同)。『アーヤンデ（未来)』誌などに初等教育普及による国民意識向上を国民国家創設の優先事項とする諸論説掲載。1930 年より財務大臣として財政改革を推進。しかし 1933 年英国（AIOC）との石油利権改定交渉担当の結果、利権の約 60 年延長（1993 年まで）を受諾させられる。シャーとの対立の結果、英国に亡命（ロンドン大学講師)。当時、北部アゼルバイジャンはソ連領、南部は中央政府の統御下に東西の州に分けられ、周縁化

２）　駐英大使として

＊第二次大戦下、連合軍イラン進駐とシャー失脚に伴い、駐英公使（後に大使）として復帰（首相職は謝絶)。AIOC との利権料支払い交渉など行う。不安定なイラン内政には批判的。アゼルバイジャンなど北部駐留ソ連軍に対する懸念。1945 年 2 月、イラン・ソ連石油開発合弁会社設立提案。ソ連のイラン領アゼルバイジャンへの「野心」が次第に顕在化。タキーザーデは「一民族・一言語」的ナショナリズムではなく、多民族・言語を包摂した緩やかなナショナリズム（文化多元主義）の信条を元に問題に対処

史料３：タキーザーデ『ロンドンの手紙』より

世界の現状では東洋諸国、特にイスラーム諸国は殆どヨーロッパ・キリスト教諸国に征服されており、トルコ、ペルシア、アラブの相違について話したり、単一国民のよ

うに一体性を持つべきこれら 3 民族の間に対立を起こすような動きは政治的に大変危険である。私は個人的にイラン人であることを誇りに思っているが、私の家系がアラブに至ることも誇りで、私をアラブ人と呼んでも怒りはしない。また私の母語がトルコ語でトルコ語系の州出身であることにも大変満足しており、私をトルコ人と呼んでも（誹謗やイラン人であることの無効性を意図してでない限り）さしつかえない。むしろ中国からバルカン半島まで広がり、今日その国民独立への自尊心が賞賛に値する偉大な民族と同胞であることは喜ばしい。しかし、私にとってイラン以上に愛すべきものはなく、私自身をカーヴェ、ファリードゥーン、キュロス、ダリウス同様に完全にイラン人と認識しており、自分のイラン人性の 1000 分の 1 といえど、たとえ貴重なものであっても他のものと交換するのは不満である。私の常套句は「イランなくして自身なし」chū Īrān ma-bāshad tan-e man ma-bāsh である。私はイラン人全てがかかる感情を持つべきと信ずるが、自らの土地、民族、言語に傾倒するがあまりアラブ、トルコと距離を置くべきではなく、これら 3 民族を同胞の国民と見なすべきである。トルコ、アラブやその言語に反対するあらゆる種の無知な過激主義はイランにとって致命的な危険性を有し、イランの民族政策でこれ以上危険なものはない。我々国民の身体の諸部分に対立を起こし、ホーゼスターン、ザンジャーン、アルダビール（訳注：後の 2 都市はアゼリー系、シャーセヴァン部族などトルコ系住民が多数）住民を外国人と見なすのは右政策上異端である。

＊アゼルバイジャン分離問題をめぐって

①アゼルバイジャン自治政府：1945 年 9 月、タブリーズでアゼリー系共産主義者ピーシェヴァリー（元トゥーデ党（イラン共産党）党員）によりアゼルバイジャン民主党設立。駐留ソ連軍の支持を背景に自治政府樹立を目指し支持者を集める。住民の自治権、地方議会早期開催、同州人口比から国会議員の 3 分の 1 の同州からの選出、不在地主の土地分配などの要求とともに、教育でのアゼリー･トルコ語のペルシア語との併用を主張。1945 年 11 月、選挙実施、12 月、自治政府樹立（ピーシェヴァリーが首班）、アゼルバイジャン制圧

②タキーザーデの対応：バクーの策動によるアゼリー語の宣伝、住民ごく一部の冒険主義者らによる同調を批判（「パン・アゼリー主義」への反対）。政府、国会、知識人らが団結してイランの一体性を守り、特にアゼリー系行政担当者を現地に派遣し、住

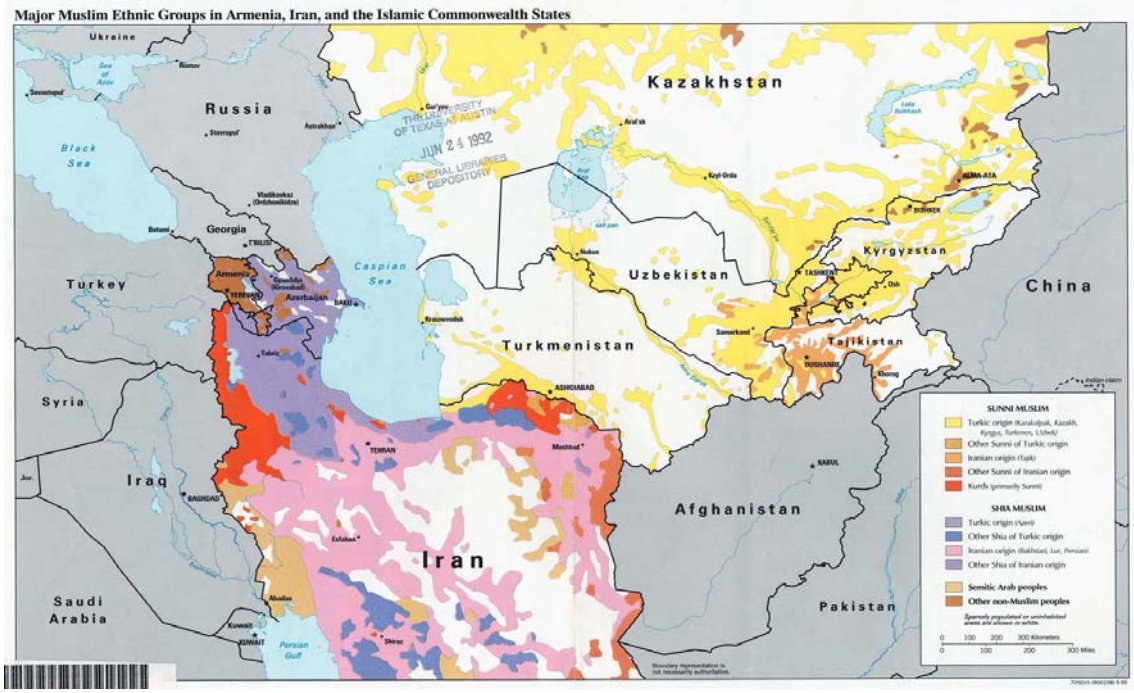
民と交流しつつ説得にあたるべきと外相に提言。1946 年 1 月、第一回国連総会（於ロンドン）でイラン代表としてアゼルバイジャン問題に関し演説、提訴。内容は、ソ連による当局者・軍を通じたイランへの内政干渉が国際紛争に発展の虞あり、国連憲章第 33 条（紛争当事者間の交渉などによる平和的解決）に則りイラン政府はソ連と交渉に努めたが成功せず、国連イラン代表団は同第 35 条の 1（加盟国による紛争に関する安保理、総会への提訴）に則り安保理にこれを提訴してその調査・解決策提示を求め、同問題に至る事実関係や協定に関する資料によって安保理に協力する、とのもの（史料 4 (p.8)）。

③ソ連との交渉：安保理でタキーザーデらとソ連側代表との交渉。ペルシア語の電報などの証拠を提示し､連合軍イラン駐留時の協定に則った終戦後 6 カ月以内（期限 1946 年 3 月 2 日）のソ連軍撤退を要求。2 国間交渉に委ねられ、カヴァーム・イラン首相がモスクワで交渉、しかしソ連軍は期限までに撤退せず。4 月、テヘランでの両国交渉でソ連軍撤退が合意。ただし北部石油合弁会社設立の条件

④自治政府の消滅：タキーザーデはアラー駐米イラン大使と連携、国連で米国などの支持を得るよう指示。1946 年 6 月、イラン政府と自治政府の交渉では自治政府側の要求が受諾。カヴァーム首相は新組閣でトゥーデ党員を入閣させ、親ソ政策をとるが、夏にイラン中部カシュカーイー部族がアゼルバイジャンに続き反乱、シャー配下のイラン軍は鎮圧せず、内閣に圧力。首相はトゥーデ党員を排除、ソ連の影響力削減。自治政府は次第に苦境に立たされ、1946 年 12 月、イラン軍によりタブリーズ奪還、消滅。ピーシェヴァリーらはソ連に亡命

⑤総括：タキーザーデの評価「イラン史上最善の出来事のひとつ」。しかし米国との接近、冷戦構造開始の端緒となった点あり。自治政府側はアゼリー・ナショナリズム的訴えかけで支持を得、土地改革など進歩的政策を行ったが、基本的にソ連の「傀儡」との疑念は拭えず、住民の共産主義化による財産没収や宗教否定への懸念、特に人口の過半数を占める農民の政治への「無関心」や徴兵制施行で働き手である男子を失った上 1946 年夏の不作などが重なり、消滅の因となったと思われる。その背景には近代以来の南アゼルバイジャンのイランへの帰属意識が存在したとも推測。なお、これ以後同地域はイランの一地方として存続、テヘランへの移住者も多い。他方北アゼルバイジャンはソ連崩壊後独立回復、アゼリー・ナショナリズムが強化。

イラン・コーカサス民族地図



アゼルバイジャン地図

The boundaries and names shown on this map do not imply official endorsement or acceptance by the United Nations or ReliefWeb.
These maps may be freely distributed. If more current information is available, please update the maps and return them to ReliefWeb for posting.

史料４：国連提訴文

JOURNAL

OF THE DU

SECURITY COUNCIL CONSEIL DE SECURITE

FIRST YEAR
No. 2 Thursday, 24 January 1946

PREMIERE ANNEE
No. 2 Jeudi 24 janvier 1946

1. COMMUNICATIONS TO THE SECURITY COUNCIL

The following communications have been received by the Security Council

(1) Letter from Head of Iranian delegation to Mr. Jebb and reply

The following is the text of a letter from Mr. S. H. TAQIZADEH, Head of the Iranian delegation, addressed to Mr. Jebb :

Iranian Delegation to the First
General Assembly of the U.N.

19th January 1946.

Gladwyn Jebb, Esq., C.M.G.,
Acting Secretary General,
United Nations.

Sir,

Owing to interference of the Soviet Union, through the medium of their officials and armed forces, in the internal affairs of Iran, a situation has arisen which may lead to international friction.

2. In accordance with Article 33 of the Charter of the United Nations the Iranian Government have repeatedly tried to negotiate with the Government of the Soviet Union, but have met with no success.

3. Accordingly, the Iranian delegation to the General Assembly of the United Nations, on behalf of the Iranian Government, have the honour to request you, in accordance with the terms of Article 35 (1) of the Charter, to bring the matter to the attention of the Security Council so that the Council may investigate the situation and recommend appropriate terms of settlement.

4. The Iranian delegation is prepared to assist the Security Council by furnishing a full statement of the facts which have given rise to the present situation, together with a copy of the relevant Treaty which binds the parties concerned.

I have the honour to be, Sir,

Your obedient servant,

S. H. TAQIZADEH (*signed*)
Head of the Iranian Delegation.

1. COMMUNICATIONS ADRESSEES AU CONSEIL DE SECURITE

Les communications suivantes ont été reçues par le Conseil de sécurité.

(1) Lettre adressée par le chef de la délégation iranienne à M. Jebb et réponse de M. Jebb

On trouvera ci-dessous le texte d'une lettre adressée par M. S. H. TAQIZADEH, chef de la délégation iranienne, a M. Jebb :

Délégation iranienne à la
Première Assemblée générale
des Nations Unies.
19 janvier 1946.

M. Gladwyn Jebb, C.M.G.,
Secrétaire général provisoire,
Organisation des Nations Unies.

Monsieur le Secrétaire général,

A la suite de l'immixtion de l'Union soviétique, agissant par l'intermédiaire de ses fonctionnaires et de ses forces armées, dans les affaires intérieures de l'Iran, une situation s'est produite qui pourrait entraîner un désaccord entre nations.

2. Conformément à l'Article 33 de la Charte des Nations Unies, le Gouvernement iranien s'est efforcé à plusieurs reprises de négocier avec le Gouvernement de l'Union soviétique, mais en vain.

3. En conséquence, la délégation iranienne à l'Assemblée générale, des Nations Unies a l'honneur, au nom du Gouvernement iranien, de vous prier, conformément aux termes de l'Article 35 (1) de la Charte, d'attirer sur l'affaire l'attention du Conseil de sécurité afin que celui-ci examine la situation et recommande des termes de règlement appropriés.

4. La délégation iranienne est prête à assister le Conseil de sécurité en lui fournissant un exposé complet des faits qui ont conduit à la situation actuelle et en lui communiquant le texte du traité qui lie, en la matière, les parties en cause.

Je vous prie d'agréer, et cætera.

(*signé*) S. H. TAQIZADEH,
Chef de la délégation iranienne.